



日本宣教ニュース

NO. 11 2018年2月

東京基督教大学
国際宣教センター
日本宣教リサーチ
発行人 山口 陽一

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」(コロサイ1:6)

【巻頭言】

「キリストさん」と呼ばれて－支援の現場から宣教を考える

九州キリスト災害支援センター理事長

日本イエス・キリスト教団福岡教会主管牧師 横田 法路

熊本地震や九州北部豪雨災害での支援に関わる中で、日本宣教について考え、教えられてきたことを、感謝をもって、お分かちさせていただきます。

熊本地震発生後、九州キリスト災害支援センターが立ち上げられ、すぐに支援が行われました。多くの方が祈って下さり、国内外のたくさんのボランティアが、キリストの愛を表すために駆けつけて下さいました。しかし最初、地域の方々は、私たちに支援を依頼する方は多くありませんでした。それでも、与えられた機会の中で、目の前の「ひとり」を大切に、その必要に心を込めて仕えようとするボランティアの方々を通してのキリストの愛が、時間と共に、少しずつ受け入れられていきました。また時間と共に、社会の一般的な関心が失われていく中で、被災地に留まり支援を継続していく時、地域の方々は、私たちにより信頼して下さるようになっていきました。そしていつの頃からか、私たちのことを「キリストさん」と親しみを込めて呼んでくださるようになっていました。

昨年、映画「沈黙」が話題になりました。福音を根付かせない日本の土壌の問題が出てきます。そのような複雑な面は確かにあるでしょう。だとしたら、私たち日本の教会・クリスチャンは、どれだけ時間がかかるとしても、日本の霊的土壌を改良する働きに取り組みなくてはなりません。クリスチャンの災害支援の働きは、日本宣教のための土壌改良の一つの働きです。「愛による土造り」です。「今年何人救われるか」という収穫を求めるだけではなく、種をまくこと、さらには土を造ることも、同時にしっかり取り組みなくては、日本宣教は、いつまでたっても、本当の意味では進んでいかないのではないかと教えられました。

災害支援を通して、宣教の課題を教えられただけではなく、宣教のすばらしい可能性も見せていただきました。このようなキリストの愛の働きとその継続を可能にするキリストのからだ(教会)の存在です。ただキリストの愛のゆえに、報いを一切求めることなく、日本各地、世界各地で、祈り、献げ、奉仕くださっている多くのクリスチャン・教会(支援団体や宣教団体を含む)を通し、危機の中で、つながりを取り戻したキリストのからだの美しさと力強さが、被災地で確かに証されているのです。詳しくは、熊本地震を経験した牧師、支援センターのスタッフたちが共同で執筆した『「キリストさん」と呼ばれて－支援の現場から宣教を考える』(いのちのことば社、2018年)をお読みいただけたらと願います。心からの感謝と共に。

「刈る者は報酬を受けて、永遠の命に至る実を集めている。
まく者も、刈る者も、共に喜ぶためである。
そこで『ひとりがまき、ひとりが刈る』ということわざが、
ほんとうのこととなる」(ヨハネ4章36-37節)



【JMRレポート】

今回のJMRレポートは、東日本大震災後「宮城宣教ネットワーク」を立ち上げ、その代表として現在に至るまで、継続して宮城県内の地域宣教協力の実践に取り組まれている大友牧師にお願いして、寄稿していただきました。

また、『中外日報』のオンライン情報から、記事を転載させていただきます。

「東日本大震災によって試された教会形成」

宮城宣教ネットワーク 代表

塩釜聖書バプテスト教会 牧師 大友 幸一

序

2011年3月11日の東日本大震災は、宮城県の被災地に宣教をもたらしました。半年後の9月に宮城宣教ネットワークが構築され、今に至っています。被災地は海岸近くの農村、漁村の集落が多く、これまでは伝道が難しいと敬遠されていました。ところがそこに求道者や決心者、受洗者が起こされ、その群れが「家の教会」、あるいは新しい会堂によって養われています。私たち塩釜聖書バプテスト教会は6つの家族が津波被害を被りましたが、その2家族は「家の教会」でした。それらは新しい家屋での「家の教会」の再建を果たし、宣教活動に励んでいます。

宮城宣教ネットワークに関係する教会や働き人の報告によれば、震災から2015年9月までの受洗者は90名、決心者は188名、また教会等は38ヶ所で産み出されました。宣教ネットワーク構築を含む教会形成の基本的な考え方、それは東日本大震災の前から抱いていたものです。5つのポイントに絞って記してみたいと思います。

1. 宣教思想の確立

47年前にクリスチャンになった当時、教会では伝道最優先を教え込まれ、とにかく伝道活動に加わらなければならない、主日礼拝や祈祷会には必ず出席しなければならない、そうしなければクリスチャンではないような雰囲気の中にいたように思います。しかし、なかなか人は救われれないという現実がありました。そのうちに、おぼろげながらクリスチャンは弱い人々に仕えたり、経済的に助けたりする善い行ないをする人ではないかとの思いが心の中においてくるようになりました。しかし教会の中では隣人への善行より、伝道の方が強調されていたように思います。35年前に牧師になってからも、伝道、伝道と心をそこに向けてきました。人がどんどん救われ、教会が大きくなることを願っていましたが、思い通りにはなりません。それで福音書を読み、イエス様の伝道について調べてみました。その結果、どうも自分が伝道活動として実行していることと、聖書が教えている伝道とは違うのではないかと、だから人が救われれないのではないかと考えるようになりました。

十数年前、クリスチャン新聞や様々なキリスト教関係の雑誌から「キリスト者の社会的責任」「統合的宣教」「まるとの福音」等の言葉を目にするようになりました。教会はキリスト者しかできない福音を伝えるという霊的な戦いと共に、社会的な面での助けをする、つまり貧しい人に施し、弱い人々を励ます役割があることを知りました。その二つの使命を果たしていく時に、地上に神の御国を実現させていくのだと分かりました。

教会がこの社会に対して実行するまるとの福音宣教、それを御国を拡大する宣教と定義するならば、「ソーシャルミニストリー／エバンジェリズム」であることがはっきりと分かりました。「／（スラッシュ）」はどちらかという意味ではなく、ソーシャルミニストリーはエバンジェリズムであり、エバンジェリズムはソーシャルミニストリーなのです。決して分離してはいけないもので、社会に対する働きかけと福音提示が、コインの裏表のような形をとっているのが、聖書が教える宣教であることが明確になりました。

その宣教思想を教会で学んでいました。特にリーダーたちとはよく学んでいたのも、当教会の震災復興支援プロジェクト「ホープみやぎ」の働きは継続できたと思われまます。

支援活動をしていた被災地のある牧師は、外部からのボランティアをほとんど受け入れていました。その町の仮設住宅に多くの支援ができ、その中から救われる人々も起こされていました。とても評判の良い教会の働きでしたが、3、4年と過ぎていくうちに3.11以前からの古くからの教会員から牧師への不平不満が出てきました。何故こんなことが起こったのでしょうか。その理由のひとつは、宣教思想が牧師と教会員同士で分かち合われていなかったからではないでしょうか。

被災地で支援活動を続けていくためにはしっかりとした宣教思想が必要でした。教会がこの世にどのように宣教を進めていくのか、みことばを根拠にしてしっかりと学んでおかなければ、長期的に宣教できなくなったり、教会が崩れてしまうという危険性があります。ですから平時の時に自分たちの教会の宣教思想を確立しておくことが大切になります。

2. 家の教会による開拓

私たちが開拓伝道、つまり教会を産み出すことを考える時、どのような教会を目指すべきで、教会がこの地上に存在する目的や使命が何であるのかを、聖書からはっきりと学ばなければなりません。

開拓伝道中の教会は常に伝道を意識しています。何とかしてひとりでも多くの人に福音を伝えて、ある程度の人数にしなければならないと考えています。その動機はどこにあるのでしょうか。もちろん福音宣教大命令があるからですが、果たしてそれだけでしょうか。ある程度の人数になれば経済的に独立できません。そこでの働き人の謝礼、建物の費用を捻出することができません。いつの間にか教会会議は、いかにして伝道を展開していくかではなくて、金銭の話題において議論沸騰ということになってしまうのです。また、教会がある程度の人数を確保し、経済的に安定していくと、伝道という言葉は少なくなってきた、内部を固めよう、もっと霊的な成長を目指そう、教会員の交わりを大切にしようと、内向きになる傾向が出てきます。他の教会から開拓伝道の話聞いても「もっと教会が大きくなってから。」「今は教会員を育てる時だから。」と言いつつ、重い腰を上げないという現実があります。もちろん教会はいろいろな人々を抱えています。また教会員のニーズは様々です。ですが、そればかりに労力が奪われ、問題は解決しないばかりか、元々持っていた伝道への思いも消えてしまうことがあるのではないのでしょうか。

それでは、どこに日本の教会のモデルを見出すべきでしょうか。日本のプロテスタント教会のルーツは1500年代のヨーロッパでの宗教改革にあります。宗教改革はローマカトリックというキリスト教社会での改革であり、全くの異教社会での改革ではなかったのです。ところで日本は八百万の神々を崇める完全な異教社会です。ここでの宣教モデルをプロテスタント教会の伝統に求めることは果たして最善のことでしょうか。

そのモデルを「使徒の働き」やパウロの各書簡に求めるならどうでしょうか。当時の世界は様々な神で満ちていました。使徒時代の教会は立派な会堂があり、何百人、何万人と集まる、教職者と一般信徒を区別する制度化された教会ではなく、十人前後が世話好きの家長の家集う「家の教会」だったのです。そのような教会は産まれることもあれば消えることもある、自由な集まりでした。彼らが普遍教会の一員であることはイエス・キリストを信じる信仰によって確信するところですが、地域教会である「家の教会」への所属はどこでも同じというような考えがあったのではないのでしょうか。使徒時代には教団・教派の教会はなかったのです。そのような教会の発展の様子が聖書に記録されています。

「こうして教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行った。」(使徒9:31)

使徒時代のエルサレム教会への迫害、それによってもたらされたキリスト者の痛み、苦しきは福音宣教の拡大へとつながりました。当教会の二つの「家の教会」は3.11で大きな試練に遭ったにも関わらず、その宣教は前進しているのです。ここに聖霊の働きを見ることができます。被災者は被災者らしく、とはこの世の人々の考えで、聖霊を宿した人は被災者となってからいよいよ自分のなすべきことがはっきりと示された、つまり人生を宣教特化することへと導かれたのではないかと思われまます。

3. 責任伝道圏の設定

イエス様が教えてくださった祈りの中に「御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。」との祈りがあります。ここで「地」と言われているのはこの地上のことであり、私たちの身の回りという意味です。この地上に御国が来ることが私たちキリスト者の願いです。それではどのようにして主のみこころが実現する御国がもたらされるのでしょうか。それは聖霊を宿したキリスト者がたくさん産まれることで可能になるのです。つまり福音を伝えることによって実現していくのです。私たちは全世界に福音を伝えることを命じられています。全世界に伝えるには各々の地域教会にそれぞれが担当する地域があると考えるのが自然ではないでしょうか。地域教会である私たちの塩釜教会が責任を果たさなければならない地域はどこでしょうか。御国をもたらさなければならないところはどこでしょうか。そのような祈りの中から「責任伝道圏」の考えが生まれてきました。

これまで日本のキリスト教界で教会形成がきわめて難しい地域と言われていたのが被災地です。何故、難しかったのかということを考えなければなりません。それは今までやってきた伝道方法や教会形成が、そこに合わなかったからではないでしょうか。つまり難しさというのは地域性の問題ではなく、私たちの決まりきった伝道方法を見直さなかったからではないかと思われま

す。パウロは、偶像の町アテネで創造主なる神様についてこのようにメッセージしました。

「神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになりました。これは、神を求めさせるためであって、もし探し求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです。確かに、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。」(使徒 17:26, 27)

歴史における様々な時代、様々な住まいの境界は、神を求めさせるための創造主のご計画であるということです。創造主は神を求めさせるために地境を設けてくださいました。私たちはその地境を考えずに、日本全土はどこでも同じという視点で伝道してきました。地境の内と外では伝道方法は違わなければなりません。

パウロは伝道対象者をみな同一とは考えていませんでした。むしろ、相手を理解し、相手の立場に立ち、最もふさわしい方法で福音提示をしていたということであり、相手を自分に合わせるのではなく、相手に自分を合わせていたということです。

3.11の前はほとんど福音を聞くことがなかった人々が、3.11の後に信仰に導かれています。その人々の証しによれば、クリスチャン・ボランティアの優しさ、真面目さ、温かさ、互いを思いやる気持ちなどに触れ、彼らの人格の素晴らしさに感動して、聖書に興味を持ち、信仰告白に導かれました。そして、教会が始まっているのです。その教会は既存の教会とスタイルは違いますが、確かにいのちが感じられる小さな教会です。

これまでの伝道方法にとらわれず、自分が遣わされた被災地という特殊な地境に最もふさわしい方法を見出そうと努力し、ボランティア活動してきた働き人が、宣教の実を見ているということは、注目すべきことです。

4. 教会間ネットワークの構築

「使徒の働き」とパウロの手紙から二つの宣教戦略を見出すことができます。一つは小アジア、地中海沿岸の大都市に教会を作り、その拠点を線で結ぶアンテオケ教会型、もうひとつは、小アジアにある地方都市のいくつかの教会が、エペソ教会を中心に互いに関係し合う、つまりネットワーク化したエペソ教会型です。責任伝道圏は後者の戦略に基づいています。

責任伝道圏が明らかになれば、そこに御国を効果的にもたらすためにはその地域にある他の教会との協力が不可欠であることが分かります。地域教会が存在する大きな理由は、福音を伝えてそこに御国を実現させるためです。神は御摂理の中で様々なタイプの教会を責任伝道圏に置いてくださっています。

パウロはエペソ人に宛てた手紙を書きました。その書き出しはこのようなになっています。「神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロから、キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たちへ。」(エペソ 1:1) この「エペソ」という地名が抜けている写本が発見されています。その意味するところは小アジアの諸教会に回覧されたものではないかというものです。この手紙は

ひとつの町のひとつの教会宛というのではなく、ひとつの地域にある複数の教会に宛てられたものであると理解することができます。使徒時代の教会には教団、教派はなかったので、大小さまざまな「家の教会」はすべて主の教会、ひとつの教会という考えのもとで、人材交流などが頻繁に行なわれていたのではないかと想像することができます。

責任伝道圏内にある諸教会をキリストのからだの一器官と見なすことができるなら、互いに教会は助け合わなければならないでしょう。パウロはキリストのからだとそれを構成する各器官との関係についてこう述べています。

「それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとり各器官なのです。」(I コリント 12:25～27)

互いに労わり合い、共に喜ぶコミュニティは御国です。ひとつの地域教会が、責任伝道圏にある諸教会とキリストのからだの器官のように関わり合うならば、その地域全体に御国がもたらされるのは一つの教会で御国をもたらすよりもっと効果的に実現できるはずです。その地域にあるひとつひとつの教会の規模は実に様々です。集まっている人も様々です。年齢も様々です。礼拝で歌う賛美も様々です。教団、教派の教会もあれば、単立の教会もあります。タイプが違うそれぞれの教会が責任伝道圏内にあることは恵みです。

被災地という責任伝道圏の中でこのネットワークが有効に働き、受洗者、決心者、求道者が見出されています。

5. 教会員教育の目的

牧師の役割について、「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げる」(エペソ 4:12)と記されています。具体的には、委ねられた教会員をキリストの三つの弟子像を目標に教育していかなければならないということです。私たちの教会では、①みことばに献身する人、②実を結ぶ証し人、③愛のしもべとして仕える人、になるように様々なテキストを用いて実践を含んだ学びをし、型通りではない人格的な教育を向上心のある教会員に提供してきました。

私は、教会員を弟子訓練したら、きっと伝道して魂をどんどん獲得して教会を成長させるだろうと期待していました。しかし、救われる人数に毎年あまり変化はありませんでした。それで、福音書を読み直しました。イエス様は十二弟子とどう関わっていたのか。十二弟子に何を命じていたのか等、読みながら考えました。

イエス様は何のために十二弟子を訓練したのでしょうか。私は教会が大きくなることを願っていたのですが、そうはなりません。イエス様が十二弟子を訓練した目的は、彼らを足元に置くためではなく、派遣するためでした。イエス様が命じた宣教大命令をよく見て「それゆえ、あなたがたは行って」(マタイ 28:19)に注目しました。イエス様の弟子訓練のゴールは弟子たちの派遣です。弟子たちを自立したクリスチャンに育て、教会からこの世に遣わすことでした。

教会の宣教がどうして進まないのか。どうして神の国は前進しないのか。どうして救われる人が少ないのか。その理由の一つは、教会員を訓練して派遣してこなかったからではないでしょうか。教会に人を集めよう集めようとして、派遣してこなかった。つまり、宣教大命令と違うことをしてきたからではないかと気づかされたのです。

それで当教会では訓練した夫妻の希望を聞いて「家の教会」を始めていました。そして、2011年の4月から教会の体制を「家の教会」中心にしようとしていた矢先の3.11であり、二つの「家の教会」は津波でその家屋を失いました。ところがこの二つの「家の教会」は大震災でも崩れることはなく、大津波でも流されることはありませんでした。何故なら「家の教会」はそこに集っている人々であり、建物ありきではなかったからです。

使徒時代のエルサレム教会は大きく成長したため、脅威を感じた宗教指導者たちは教会を迫害しました。ステパノを殺し、キリスト者たちは町から散らされました。着の身着のままの者たちも多かったことでしょう。しかし、彼らは不自由な生活の中でみことばを宣べ伝えながら巡り歩きました(使徒 8:4)。当教会の開拓者たちは、津波で全てを失いましたが、それでへこたれることはありませんでした。いや、ますますみことばを宣べ伝えることに使命を感じて宣教活動を続

けてきました。

何故このようなことができたのか、その理由は、教会員を自立したキリスト者として育て、住んでいる地域に派遣することを目的にしてきたからです。

結

東日本大震災は、日本のキリスト教会とクリスチャンを試練に投げ込みました。しかし、その試練は決して無駄ではなかったことが、宮城宣教ネットワークによって明らかになりました。教会形成は難しいと言われていた東北地方の農村、漁村にクリスチャンが生まれ、教会が始まっているのです。難しいところで出来るなら、日本のどこにでも教会を産み出せるということではないでしょうか。

もし、宮城宣教ネットワークの考え方や実践が、各地の教会で用いられるなら、日本宣教の未来を明るくしてくれるのではないかと思います。東日本大震災後の宮城宣教ネットワークの活動やその報告は、弱くなっている既存の教会や、もうなすべきことは全てやり尽くしたと気落ちしている働き人やクリスチャンにとって、福音になるはずです。

<参考資料>

1. 大友幸一『東日本大震災と教会増殖』（アジアアクセス・ジャパン、2016年）
2. 大友幸一、柴田初男、ヒューレット・えり子編著『「震災と信仰調査」報告書』（東京基督教大学国際宣教センター日本宣教リサーチ、2016年）
3. 大友幸一『宮城県内の教会増殖の提言：信徒主体の「家の教会」による開拓伝道』（2011年論文）

中外日報の新聞記事から【2017年9月～2017年12月】

布教にこだわらない 社会貢献へ様々な催し

（浜松市西区 臨濟宗妙心寺派龍雲寺 木宮行志副住職）

2017年9月27日付 中外日報（キラリ — 頑張る寺社・宗教者）

浜松市西区の臨濟宗妙心寺派龍雲寺では写経会、坐禅会などの基本的な取り組みから、婚活、映画祭、ピラティス、大工体験まで幅広くイベントを開催している。企画する木宮行志副住職（39）は、対象を檀家に限らず、目的を布教にこだわらずにお寺だからこそできる社会貢献を目指している。

父の木宮一邦住職は静岡大教授を務め、常葉学園短期大学長、浜松大学長、副理事長を歴任。教育者だった先代、先々代住職も兼職で寺の外に出ることが多く、坐禅会などの活動は必ずしも活発ではなかった。15年ほど前に僧堂から寺に戻った行志氏は、専従の副住職として青年部を発足させるなど、寺での活動を広げていった。その一つである小学生を対象にした「子供サマースクール」は今年で13年目を迎える。好評で100人の定員は毎年、募集を始めて10分で埋まるほど。子どもたちは坐禅を体験したり、食事の作法や「いただきます」の意味について学んだり、遊びながら、いのちの大切さを、身体を通して覚えていく。

それを支えるのは、父母のボランティア、寺の婦人部、檀家の人々の協力だ。子どもたちに手品を披露したり、レクリエーションの内容を提案してくれる。行志副住職は「様々な人が集まり、お互いの得意分野を生かすことで良いアイデアが生まれる」と話す。

その思いから「龍雲寺だけに参拝者が訪れても意味がない。他のお寺と一緒に盛り立てていかなければ」と2010年に始めたのが、お寺での婚活イベント「吉縁会」だ。

静岡から発信し、現在では東京、名古屋、岐阜、大分、仙台と開催地が広がっている。行志副住職が中心になるのではなく、それぞれの地域の僧侶らが主体的に企画・運営などに携わる。こうした取り組みが布教につながるのか。行志副住職は「目先の利益ではなく、社会貢献のためだけに様々なイベントを企画できるのがお寺の強み。人々が寺に何を求めているのかを把握し、現代に生きる人々の考えや悩みに向き合っていくことが肝要だ」と語っている。（甲田貴之）

掲示伝道を始め 40 年 苦情歓迎自らの学びに

(静岡県磐田市 臨濟宗妙心寺派見性寺 松山正宗住職)

2017 年 8 月 30 日付 中外日報 (キラリ一頑張る寺社・宗教者)

掲示伝道を行う寺院は少なくないが、静岡県磐田市の臨濟宗妙心寺派見性寺の掲示板には、松山正宗住職(72)の個性的で力強いメッセージが月替わりで掲げられ、地域住民に親しまれている。

7月のメッセージは「共謀罪法という 虎に 平穩を 喰われるなよ」。「共謀罪法」を虎と表現し、「平和」や「自由」より広い意味を込めて「平穩」を選んだという。「偉人の格言を引用するのではなく、自分の言葉だからこそ訴える力がある」と松山住職は話す。

掲示伝道を始めたのは40年前。最初の10年はほとんど反響がなかったが、近隣の高校生の中で話題に上るようになった。現在では、掲示板を見るためにわざわざ寺を訪れる人もいる。決して好意的な反応ばかりではない。中には掲示板の言葉に苦情が寄せられることも。つい先日も「政治色のあるメッセージは控えるべきではないか」と女性が電話をかけてきた。松山住職はそのような人たちをお客さまと呼び、「掲示板を真剣に読んで、自分の中で理解しようとして、消化しきれなかった人たちだから」と、時には何時間も電話で、または直接膝を突き合わせて話を聞く。自分の考えを出し尽くしたお客さまが「私はこう思いますが、住職のお考えは？」と尋ねてくる。そこで僧侶としての考えを説く。掲示伝道がきっかけとなり、悩み相談に訪れる人も増えた。

始めた当初は人生訓が多かったが、近年は政治的なテーマを扱うことが多くなった。8月は「奴隷解放 植民地放棄 話し合って 戦争も 放棄しよ」。歴史の進歩で奴隷も植民地も放棄することができた。次は戦争だということと、そのためには武力ではなく、話し合いこそが重要となるとの思いを込めた。

「×も45度廻せば+になる」。これもメッセージの一つ。苦情も視点を変えればお客さまという考えだ。

松山住職は「私の言葉が正しいというわけではない。人にも読んで考えてほしい。問題提起だ」と語る。政治を扱う際に気を付けているのは特定の思想に偏らない平衡感覚。そのため、先月のメッセージで批判的だった人が今月は賛成してくれることもまれではない。

「自分と違う考えの話を聞くことで、私自身も学んでいる。苦情があることが本当にうれしい」と笑顔を見せる。

(甲田貴之)

教団・教派、宣教団体の機関紙・ニュースから

カトリック中央協議会 (<会報 2017 年 9・10 月号 公文書>)

2017 年平和旬間会長談話

2017 年「平和旬間」にあたって

日本カトリック司教協議会 会長談話

「世界平和の日」の教皇メッセージは、今年の元旦で50回目を数えました。その中で教皇は、ベトナム戦争最中の1968年に発表された第1回「世界平和の日」の福者パウロ六世教皇のメッセージに言及しておられます。同教皇は、「今(20)世紀の最近数十年を通して、平和が人類の進歩の唯一かつ真の道筋であることが浮き彫りにされました」と述べられました。今年のメッセージで、フランシスコ教皇は、「非暴力」が“平和を築くひとつの方策”であるという考えを説明しておられます。そして「争いにまみれた状況の中で『(他者の)尊厳への深い敬意』を抱き、積極的な非暴力に基づく生き方を実践しましょう」(1項)と呼びかけ、「今、イエスの真の弟子であることは、非暴力というイエスの提案を受け入れることでもあります」(3項)と断言しておられます。

「積極的な非暴力」とは、愛が暴力に打ちかつということです。教皇は、この表現の意味について、マザー・テレサが1979年にノーベル平和賞を受賞した際の言葉を引用します。「わたしたちの家庭には、爆弾や銃は必要ありません。平和のために破壊すべきではありません。ただ一緒にいて、互いに愛し合ってください。---そうすれば世界のあらゆる悪に打ちかつことができます」(4項)。

日本の司教団が、聖ヨハネ・パウロ二世教皇の『広島平和アピール』(1981年)を受けて、戦後50年、60年、そして70年にくり返し表明してきた、戦前・戦中の教会の戦争責任への反省に基づく平和への決意と教皇の今年の平和メッセージは合致しています。

わたしは、憲法施行70年にあたる今年、改めて日本国憲法が保障する平和的生存権を確認したいと思います。平和は軍事では築けません。特に今、近隣諸国やテロの脅威に軍備で応じるのではなく、北東アジアと世界の平和のために真摯な粘り強い対話を実践することを日本政府と国民に訴えます。

安倍晋三首相は、憲法記念日の5月3日に、国会以外の場で、具体的な日程を挙げつつ、第9条に自衛隊の存在を明記したいという考えを示しました。もしそれが実施されるならば、これまで「自衛のための必要最小限度を越えない実力」を有する部隊と説明され、防衛予算や軍事行動に厳しい制約を課せられていた自衛隊は「軍隊」となり、「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」と定める第9条第2項が効力を失うことになりかねません。そうなれば、北東アジア、さらには世界の緊張はますます高まるでしょう。

さて、今年は宗教改革500周年でもあります。日本福音ルーテル教会と日本カトリック司教協議会の共同主催で、11月23日に、長崎の浦上天主堂において合同礼拝と対話フォーラム・シンポジウムを行います。長崎は、キリスト教の弾圧と迫害を経験した町でもあり、20世紀の世界の悲劇を象徴する原爆の第二の被爆地でもあるからです。争い分裂していたキリスト教の諸教会・教派が「祈り」と「対話」を通して「対立から和解へ」歩み出す姿を、「対立から平和の実現に向かうモデル」として世界に示すことができれば幸いです。

その長崎にとって、今年はいわゆる「浦上四番崩れ」が始まって150年目、来年は21藩22カ所に流配された信徒たちの「旅」立ち150年目にあたります。司祭との出会いから力を得て、幕末から明治の初めに自らの信仰を表明して立ち上がったこの潜伏キリシタンたちは、日本の歴史において「思想・良心・信条の自由」に目覚め、国家権力が個人の内心にまで侵入してくることにいのちをかけて抵抗した数少ない人々であったとも言えるでしょう。こうした日本のカトリック教会の歴史に照らして、先の国会で強行に採決され、「共謀」を取り締まることで「監視社会」の到来や市民的自由への萎縮効果が懸念される「組織犯罪処罰法改正」にも慎重な注視が求められます。戦前・戦中の時代、国家権力が治安維持法などで人々の言論・思想・信条の自由を侵害したことにより、日本は戦争への道をひた走り、周辺国を含めて2000万人以上といわれる犠牲者を生じさせました。二度と戦争への道を歩むことなく、また、信条の自由をはじめとする基本的人権と人間の尊厳が最大限に尊重される社会を子や孫に残すことがわたしたちの務めです。

世界のさまざまな場所で、テロが頻発しています。自国の利害を優先するあまり、紛争や内戦、難民の増加、人身売買や虐待、環境破壊などのグローバルな問題の解決に、各国が共同歩調をとれない風潮も危惧されます。強い者たちの争いで最も被害を受けるのは、いつも子どもと女性、高齢者など、無防備な人々です。

日本においても、東京電力福島第一原発事故の被災者は、生活と人生そのものを奪われた傷に苦しんでいます。基地負担の多くをひとり押しつけられている沖縄の人々も理不尽さを噛みしめています。こうした人々のために祈り、平和で公正な社会が実現するために、わたしたちに何ができるかを考え、実行するようにしましょう。

「地域的、日常的な局面から国際的な秩序に至るまで、非暴力がわたしたちの決断、わたしたちの人間関係、わたしたちの活動、そしてあらゆる種類の政治の特徴となりますように」(1項)と訴える教皇とともに、今年、「平和を実現する人々は、幸いである」(マタイ5:9)というイエス・キリストの教えを思い起こしながら平和旬間を過ごしましょう。

2017年7月6日

日本カトリック司教協議会会長
カトリック長崎大司教区 大司教 ヨセフ 高見 三明

教団伝道基本方針

「イエスは、近寄って来て言われた。『わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。』」(マタイ28章18～20節)

1. 祈祷運動 ー共に祈ろうー

主の伝道命令に従い、罪の悔い改めと救いの感謝の祈りをささげるために、「日本伝道の推進を祈る日」(毎月第3主日)を設けて共に祈りを合わせる。特に2017年は宗教改革500周年記念の年として、10月31日の宗教改革記念日に向けて日本伝道の推進を祈る。それ以後は、毎月第3主日を「日本伝道の推進を祈る日」として、教団所属各教会・伝道所等において祈りを合わせる。

2. 信徒運動 ー共に伝えようー

礼拝において聖霊の力を受け、聖書を読み、熱心に祈り、喜びをもって主の恵みを証しし、キリストの十字架による罪のゆるしの福音を宣べ伝える信徒として共に成長することを目指す。そのために、教会・教区・教団において、伝道に励む信徒の養成のための学びや役員の研修などを持つ。

3. 献金運動 ー共に献げようー

日本の各地にあって、日夜伝道のために苦闘している教会・伝道所を具体的に覚えて祈り、その働きを支えるために共に献げることによって、信徒および教師における献身の志が高められ、献身者を生み出す教会となるように献金運動を展開する。

2017年7月11日 第40総会期第2回常議員会制定

「聞き合う・祈り合うことから」

宗教改革500年を記念して「教団伝道推進基本方針」を教団の教会・伝道所に示し具体的に教団の伝道を推進していきたいと願っている。この時、2018年の教団年鑑が発行され、統計で受洗者939名という現実を突きつけられた。939名が主の民に加えられたことを教団の何よりの喜びとして受け止めたい。しかし、一方、教団の伝道の行き詰まりという現実を突きつけられていると思える。

壮大なヨーロッパ伝道は、パウロの伝道が挫折し行き詰るところから開かれる。聖霊によって伝道が禁止され途方に暮れるパウロは「マケドニア州に渡って来て、私を助けてください」という声を聞く。日本基督教団において、今、伝道の推進力である「マケドニアの叫び」をどのように聞くかが重大な課題だ。

まずは、各教区の話の聞き合うことから始めたいと、今年度第2回目の教区議長会議を12月に1泊2日で開催する。この教区議長会議で各教区の伝道の取り組みを聞き合うことによって、何よりも伝道推進基本方針に示されているように祈り合うことによって「その叫び」を聞いていきたい。

日本基督教団 第40総会議長 石橋 秀雄

◇伝道対策検討委員会：「基本方針」展開案を協議

9月6日、教団会議室にて、第4回教団伝道対策検討委員会を開催した。前回議事録承認後、本検討委員会において設置した教団機構・財政検討小委員会の報告を受けた。同小委員会からは、案件の検討のタイムスケジュールを話し合ったほか、33総会期「教団機構改正・財政検討委員会」と35総会期「教団機構改正・財政検討委員会」の各答申、および、39総会期「将来構想検討委員会」報告の整理・分析・検討をしたこと、予算決算委員会における教団財政検討内容の確認をしたこと、今後、各教区の機構や他教派の機構なども参考にして検討を進めることとしているとの報告がなされた。

続いて、三役より、資料「『教団伝道推進基本方針』の展開に向けて」により、今総会期第2回常議員会において制定した「教団伝道推進基本方針」の具体的な展開案が紹介されたほか、資料「全国伝道推進献金（試案）」により、教団各個教会・伝道所の伝道と基礎的財政を支える献金制度の設置案が提示され、全体で協議した。

協議においては、信仰の一致をどう確保するのかを明確に打ち出す必要がある、日本全体への伝道は私たちの責任であるとの思いを持つことができるとよい、自分の教会のことだけではなく教団全体を考え、共に伝道のために献げるという意識と祈りを生み出すものでありたい、新たな献金制度が唐突に上から決められたように感じられることのないようにしたい、各地の教会の様子を知り合うことからお互いの信頼関係を作っていきたいといった意見が出された。

その後、本年12月11～12日に予定している第2回教区議長会議の内容について意見交換をしたほか、同会議に本検討委員が陪席することとした。（雲然俊美）

◇宣教委員会：「宣教方策会議、主題決定」

第3回宣教委員会が10月10・11日両日開催された。宣教委員会では、総会期に一度、教団会議室を出て各地で行われている。今回は、古津啓太委員が牧する神戸東部教会を会場としての開催であった。

開会礼拝において古津委員は神戸のキリスト教の歴史に触れつつエゼキエル書37章15節以下の御言葉を取り次いだ。

その後、いつものように常設専門委員会、自主活動団体報告を受けた後に、主として三つの事項について協議した。

「宣教方策会議」に関して前回、前々回と継続して協議を進め、更には、前回委員会で選ばれた担当者会議の報告を踏まえて以下のように結論を出した。主題として「日本伝道をどう考えていくか～宣教基本方策をもとに」を掲げ、分団協議は宣教基本方策の8項目をワールドカフェ形式で行うこととした。なお自程・会場は、2018年3月5～6日、富士見町教会である。

「牧会者とその家族のための相談室」設置に関する件は、加藤幹夫委員長に陪席を求め準備状況の説明を聞き、常議員会への提案のための具体的な活動内容の整理などを、さらに、準備委員会で作業をしていくように求めた。

「青年伝道」については、教育委員会での協議資料をもとに「教団に青年伝道・育成に特化した部署を設置することとし、「青年担当幹事」と「青年伝道担当宣教師」の配置、SCFとの協力などが提案された。既に行われている中高生大会や青年大会、ユースミッションをはじめとする海外派遣、受入プログラムを扱うのみならず、教会青年リーダー研修会を開催するなどのアイデアを共有した。重要な案件であるので、継続して審議することとした。

なお重ねて、2日間の委員会のため格別な配慮をしてもらった神戸東部教会に謝意を表する。

（岸 憲秀報）

日本聖公会【日本聖公会 管区事務所だより（2017年11月25日 第327号）】

CCEA 主教会に参加して

—いま、日本聖公会がなすべきことは—

横浜教区 主教 ローレンス 三鍋 裕

10月11日から16日まで、ミャンマーのヤンゴンで東アジアの聖公会の主教会が行なわれ参加しました。この集まりは東アジアの諸教会が自律管区として成立するまで相互交流のために保たれてきました。多くの管区は過去数十年の間に自律管区になりましたが、今もこの交流は続いています。ホンコンは英国領でしたし、フィリピンはアメリカ聖公会の一部でした。その意味では日本聖公会は管区としての歴史は他より古く、現在はオーストラリアと台湾と同じく準会員として参加しています。この3教会とフィリピン独立教会は主教が各1人参加しますが、大韓聖公会、フィリピン聖公会、ホンコン聖公会、ミャンマー聖公会、東南アジア聖公会は各教区単位で出席します。今回は28

人の主教と各管区の常任委員、それにお連れ合いたちが参加しました。総勢50人余り、日本聖公会からは京都教区の小林聡司祭も参加されました。毎年開かれます。

普段は孤独な主教たち？の交わりと学びが主で、何かを決めるという会議ではありませんが、アジアの聖公会は少数派としてイスラームや仏教との緊張と融和の中で働いていますから、お互いの学びと分かち合いは大切な目的です。状況はそれぞれ違います。アメリカや欧州の教会がそれぞれの地域に住んでいる人々の実情に配慮しながらその務めを果たそうとしているように、アジアの諸教会もそれぞれです。シンガポール教区は一教区といってもネパールまでの9か国を含んでいますから、色々な状況に配慮が欠かせません。例えば性的少数者にかかわる事柄でも、一つだけが正しいとはなかなか言えないようです。各教会の状況報告と、四つの発題講演とに続くグループ討議がありました。宗教過激主義に対する教会の姿勢、地球環境特に温暖化の問題、平和と和解。それにキリストの使徒としての務め、これは何かと思いましたが実際の内容は献金のお話でした。

日本に対する期待と厳しさも感じました。資源リサイクルの観点から、日本のごみの分別収集がシンガポールの専門家から紹介されていました。原発に関しては、日本のような高度な技術を持ってても事故は起きるし、核燃料廃棄物の問題も未解決なのかというのが皆さんの感想らしい。平和と和解に関しては主教たちは勉強しておられるのでしょうか、従軍慰安婦の問題や靖国問題はどうかという質問が出ました。小さな教会ではあるが一生懸命声を上げている、と説明して理解はしてもらいましたが、アジアでは戦争はまだ過去の問題ではないようです。今はミャンマーといいますが以前のビルマ、つまりはビルマ鉄道建設の現場ですから良い記憶であるはずがありません。それを乗り越えて配慮していただきますが、過去が無というわけではありません。日本聖公会の平和と和解への働きが期待されているのを感じざるを得ません。アジアの同労者と共に果たすべき務めでしょう。最後にミャンマーの感想。全体として豊かになりつつあるアジアにあって、ミャンマーはまだ貧しいお国のようにです。民族問題などでとかく話題にもなるお国ですが、アジアらしい市民のエネルギーも感じます。日が暮れると本当に多くの屋台が出ます。貧しいけれども、その中にも楽しそうに団らんの時を過ごす姿を見ます。こどもたちの笑顔もあります。平安を祈りたいと思います。

日本同盟基督教団「世の光 NO.803」（2017.8）

「使徒の働き」に見る信徒の活躍

理事 野口 富久

「さて、ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人々は…ユダヤ人以外の者にはだれにも、みことばを語らなかつた。ところが、その中にキプロス人とクレネ人が幾人かいて、アンテオケに来てからはギリシャ人にも語りかけ、主イエスのことを宣べ伝えた。」（使徒の働き11章19～20節）

ユダヤ・サマリヤ地方のリバイバル

使徒の働きを見る時、信徒の活躍が教会の誕生や教会形成に大きく関わっていることが分かります。教職だけでなく、信徒の活躍が教会祝福の鍵であることを確認したいと思います。

9章31節を見ると「こうして教会は…全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数が増えていった」とあります。どうしてユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり福音が伝えられたかということ、8章1節にあるように、ステパノの殉教を引き金として、エルサレム教会への大迫害が起こり、使徒以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らされ、4節、その人たちは、みことばを宣べ伝えながら巡り歩いたからです。

つまり、使徒以外の信徒が、エルサレムから出て、ユダヤとサマリヤの地方に散らされ、みことばを宣べ伝えながら、巡り歩いたことを通して、福音がそれらの地方に伝えられたということです。

アンテオケ教会

世界宣教の拠点となったアンテオケ教会の誕生も信徒たちによるものでした。それが冒頭の引用聖句です。当時、ユダヤ人以外の人々に福音を宣べ伝えるということは、考えられないことでした。異邦人たちに対する偏見、蔑視があり、彼らには語られませんでした。ところがその中にキプロス人とクレネ人が幾人かいて、ギリシャ人にも語りかけ、アンテオケ教会が誕生しました。異邦人伝道の突破口を開いたのは信徒たちでした。

信徒の働き

信徒の活躍ということから言えば、サマリヤのリバイバルをもたらしたのは、信徒伝道者のピリポでした。エチオピアの宦官に聖書を解き明かしたのも、ピリポでした。ローマ教会は、信徒たちでつくった教会ですし、コロサイの教会もパウロが開拓した教会ではなく、信徒たちによってできた教会でした。使徒の働きを読む時「使徒の働き」であると同時に「信徒の働き」と言えるのではないかと思うぐらいです。アクラとプリスキラの家でパウロは働きながら伝道しました。彼らはパウロの知識、背景から聖書の指導者として尊敬し、彼を支えました。エペソにやって来たアポロは旧約に通じていたが、「イエスがキリストである」ことを知りませんでした。そこで二人はアポロを家に招き、イエスの福音を伝え、「彼を励まし」「手紙を書き」、コリントの教会に彼を紹介する配慮を行いました。パウロは、各地を宣教し、みことばの種を蒔きました。ツラノの講堂で2年間語り、「アジアに住む人はみな、主のことばを聞いた」とあります。人々が、みな彼のところに行って話を聞いたのでしょうか。いやそうではなく、イエスの福音を聞いた信徒たちがおのおのところに帰り、自分の言葉・証言として福音を宣べ伝えたのです。信徒が主役となり、教会とこの世との接点として用いられ、イエスさまの栄光を現わしました。信徒が接点とならなければ、福音のこの世への広がり期待できません。アクラとプリスキラを「家の教会」と表現している箇所があります。彼らのようにクリスチャンホームを開放して、気兼ねなく人を迎え、喜んで人に仕える家庭となるなら、福音はその地に広がっていくことができるでしょう。「家の教会」のような主を中心とした小さな交わりは、人の価値観・態度・性格に変化をもたらすためにご聖霊に用いられます。小さな交わりはまた、相互学習効果・模倣の効果・心の癒しなど様々な恵みをもたらします。使徒の働きを改めて見る時、信徒の活躍が教会祝福の鍵であることを教えられます。

(松原聖書教会牧師)

日本同盟基督教団「世の光 NO.806」(2017.11)

2017年、夏の終わりに、浜名湖バイブルキャンプで教団家庭教育部主催「マリッジコース」が開催されました。9組のカップルが野口富久師・幸子師夫妻のリードによって、生い立ち、過去・現在・未来の家庭生活について話し合い、祈り合い、豊かな時間をもちました。

「マリッジコース」はイギリス聖公会から始まり、現在は世界各地で用いられている、より良い夫婦をデザインするための学びと交わりのときです。今回、すべての参加者から「良かった！」という感想をいただきました。その中から一組のご夫妻が、参加した恵みの証しを書いてくださいました。

【夫の証し】

今回、マリッジコースに参加するきっかけとなったのは、友人スタッフからの誘いの声でした。結婚14年目となる私たち夫婦ですが、日常の様々な葛藤から、第三者による介入の必要性を痛感していた矢先のことでした。そんな折からのお誘いに、私たちは何の躊躇もなく参加を決めました。振り返ってみれば、これも神さまの恵みであったと感じざるを得ません。

参加して最も驚いたのは、夫婦で語り合う時間が想像以上に長かった、ということです。三人の子育てに追われる私たちは、プライベートな会話を持つのが至難の業でしたので、まるで夢を見ているような心地がしたのを記憶しています。託児スタッフに子ども達を預け、食事の時だけ顔を合わせるという不思議な毎日です。しかし、お陰様で我々夫婦は多くの諸問題について時間を取って話すことができました。指導テキストを用いながら、段階的な意見交換がなされました。

そうした中で、多くの発見をすることができました。個人的には、肉親との関係性について等、今まで気付かなかったことが頭にされ、自分や相手の必要としていることを知る機会となりました。そして、何よりの収穫は、今後の結婚生活に希望を持てるようになったという点です。希望は、人を前に進ませる原動力となります。

今回は、参加せざるを得ずに参加したこのセミナーですが、もっと早く参加していれば、という思いもあります。そして、いつかもう一度、新たな視点を持って参加できたらと願っています。豊かな導きを与えてくださった神さまに感謝します。

【妻の証し】

学び進むにつれて自分の内面がどんどん掘り下げられていきました。育った家庭や自分の生き立ち、自分のコミュニケーションの傾向パターン、喜びや怒りのパターンなど、自分自身を見つめなおす特別な時でした。それをたっぷりと時間をいただいて夫婦で分かち合う中で、互いの傷にじっくり向き合うことができました。夫（私）がどのようにして今の夫（私）となっていたのか、育ちのグラフを見ながら二人で発見していきました。自分ですらあまり向き合わない深い部分を共に分かち合うことは、夫婦だからできる、信頼に基づくとても親密な時間でした。分かち合うことで親密さが更に増し加わるのを感じました。実際には過去を振り返ることで悲しい気持ちにも囚われました。けれども悲しみ喜びを共に味わう伴侶がいるとはなんとという慰めでしょうか。主が与えてくださった結婚の祝福です。また夫の痛みを共に痛むことで、これまで自分の願うようにしてくれない夫に対して「なんで!？」と責める気持ちでいましたが、同情の気持ち、愛する夫に寄り添いたいという気持ちに変わったことを体験しました。

夫は、実際は両親の熱心な祈りの中で育てられてきたと思うけれど、それでも思わぬところで心の傷となった部分があり、人間に託されているからには完璧な子育てはないのだと改めて感じました。更に学びの中で、自分に傷を与えた人を、決意を持って赦すことを選ぶ（選び続ける）ように教えられました。またその痛みを、夫の必要に応えられない言い訳にはならないことを学びました。ふとした時にムクムクと湧き上がる赦せない思いや被害者意識、そして喪失感。主の十字架の前にそれらの荷物を下ろし、「主の十字架ゆえに私は赦します」と告白する時、慈しみ深い主が癒しの手を置いてくださる。それを体験することができました。これからの日々の歩みの中でも夫婦でそれを体験し続けてゆきたいです。貴重な学びをいただき心から感謝いたします。

日本ホーリネス教団「JHC Revival 829号」(2017.11)

教会が病むとき

教団委員長 島津 吉成

教会は、生きたキリストのからだです。生きているということは、動きがあるということです。イキイキとしているときもあれば、残念ながら病んでしまうときもあります。では教会は、どんなときに病んでしまうのでしょうか。

①利益追求型の企業のような教会

ピーターソンという方が、こんなことを書いています。「アメリカの牧師たちは『企業経営者』の一群に変容してしまった。彼らが経営するのは『教会』という名の店である。牧師は経営者感覚、すなわち、どうしたら顧客を喜ばすことができるか、どうしたら顧客を道路沿いにある競争相手の店から自分の店へ引き寄せることができるか、…そうした経営者的な感覚に満ちている」(E. H. ピーターソン著『牧会者の神学』)。

私は、企業経営者的感覚のすべてが間違っているとは思いません。ここで問題となるのは、利益追求のみに傾いてしまった経営者的感覚ということだと思います。そのような企業は長続きせず、やがて破綻すると言われていました。

この感覚が教会の中に入ってくると、成功、名声、数などという成果を求めることに重きを置く教会となってしまいます。一人ひとりの存在を大事にし、尊重するというよりも、どんなことができるかという、その人の能力で人を評価し、being（共にいる）よりも doing（何かをする）に傾いた教会、イベントからイベントへと追い立てられていく教会となり、やがて教会員は教会生活に疲れてしまうのです。

②ゆがんだ家族のような教会

これは先ほどとは逆の形ですが、ここにも病んでしまった教会の姿があります。教会は「神の家族」と言われていますので、家族的であるということは大事なことです。ところが、「私たち

の教会は家族的な教会です」というとき、注意しなければならないことがあると思います。それは、「神の家族」というよりも、「ゆがんだ、人間的な家族」という姿に陥っていないかということです。

教会が仲良しグループになってしまっていて、閉鎖的で外から入りづらい。教会の中に親分と子分のような関係ができてしまっている。できないこと、無理なことに対して、「No」と言えない。息が詰まる。こんな症状が出ていたら、要注意です。

私たちを丸ごと愛してくださっている主に感謝し、喜びをもって主に仕えていく、ここに健やかな教会の姿があります。

日本福音同盟（JEA）の最近の動き

日本福音同盟理事 中西 雅裕

私たち日本ホーリネス教団は、いくつかの協力機関の働きに加わっています。そのひとつが日本福音同盟（JEA）です。JEAは1968年に創立した、聖書信仰に立つ福音的諸教会の交流・協力機関です。相互理解と交わりの促進、諸問題への必要な対処、宣教・援助協力・神学・社会・女性・青年の各専門委員会による調査研究の実施と情報の提供、世界の同様の団体との協力提携を目的としています。2017年6月現在、教団教派、教会、伝道団体から56の会員と41の協力会員が加盟しています。これは日本の約2000の教会、12～13万人の教会員がJEAの傘下にあることとなります。

私たち日本ホーリネス教団も、創立当初からJEAの働きに関わりを持ち、毎年総会に5名の代議員を送り、現在千代崎備道師が神学委員会委員、上中栄師が社会委員会委員長、中西雅裕師が理事・宣教委員会委員長として委員会の働きに関わり、昨年開かれた第6回日本伝道会議（JCE6）には教団をあげて、77名の教職・信徒の方々が参加しました。JEAの働きは、今までは相互理解と交わりの促進が中心でした。しかし、近年の日本の教会の現状、社会的情勢の中で、JEAに期待され、果たすべき働きは、教団・教派を超えた宣教協力を目指す方向にシフトしてきています。現在の各個教会が置かれている状況には大変厳しいものがあります。だからこそ、「うちはうち、よそはよそ」ではなく、各教団・教派における宣教協力が不可欠となってきています。他教団の教会との宣教協力、教団・教派を超えた近隣教会との統合など、さらなる意識の変革が求められてきているのです。その際、お互いの歴史や特色を尊重し合いながら宣教協力を進めていくというルールが必要でしょう。そのような意識の変革、宣教協力に必要なルールの構築等を共に考え、学び合うという働きも、今のJEAには求められてきています。互いを尊重し合いながら、「競合より協力、同業者より同労者」であることを確認し合う時代に来ているのです。「うちの教団は大丈夫、前進している。宣教協力なんて必要ない。自分たちだけでやっていく」と言えた時代は過ぎました。へりくだりつつ、神さまのなさろうとする御わざに目を向ける者たちでありたいと願います。

日本ホーリネス教団「JHC Revival 830号」（2017.12）

教会が病むとき（2）

— 律法主義

教団委員長 島津 吉成

教会をむしばむ病に、律法主義があります。律法と律法主義は違います。モーセの十戒に代表される律法自体は大事なものです。私たちに罪とは何であるかを教え、罪を自覚させ、キリストへと導きます（ガラテヤ3：24）。また、キリスト者がどのように生きることができているのか、本当の意味で神に祝福された幸いな人生はどのようなものなのかを示します。

私たちは、主イエスの十字架と復活の恵みをただ信じることによって救われます。そして、それが感謝となって、律法に示された生き方をすることができるように変えられるのです。この救いは、神さまからの一方的なプレゼントです。これに対して律法主義は、自分の力で律法の要求を満たし、神に受け入れられようとします。自分の力によって救いを獲得しようとするのです。気をつけないと、恵みと信仰によって始まった信仰生活が、いつの間にか、律法主義的な信仰生活へと変質してしまうことがあります。

律法主義が入ってくると、人は高慢になり、他者を裁くようになります。自分がこんなに頑張っているということが誇りとなり、自分と同じようにしていない人を見るとその人を裁いたり、見下げたりするようになるのです。そうすると、教会の中の間人間関係がとげとげしいものになっていきます。また、律法主義的な生き方は、高いノルマを課せられたセールスマンのようなもので、どんなに頑張っても達成できない目標を前にして、達成できない自分を責めるようになります。信仰生活が苦しくなってきます。これが律法主義という病です。自分のことで恐縮ですが、ある時期、私も律法主義的な生き方に陥ってしまったことがありました。自分で一定の基準を設けて、それに到達できない自分に失望し、信仰生活が苦しくて仕方がありませんでした。そのような時に、ある集会に出席しました。そこで語られたみことばが私の心にしみ込んできました。「愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く」(Iヨハネ4:16)。神さまは、私が何かできるとかできないとかということではなく、丸ごとの私を愛してくださっている、この愛に包まれて主と共に歩むところに信仰生活があるのだと気づかされたのです。その集会の最後に歌われた新聖歌202番「時の間をも惜みて君はわれと語ろう」は、私の大好きな賛美の一つとなりました。

今でも、気をつけないと律法主義に陥ってしまう自分があることを認めざるを得ません。だからこそ、主の愛の語りかけを聞き続けることが大切！と思っています。

日本福音同盟 (JEA) の最近の動き (2)

日本福音同盟理事 中西 雅裕

前回、教団・教派を超えて互いを尊重し合いながら、「競合より協力、同業者より同労者」であることを確認し合う時代に来ていることを書かせていただきました。この時代に求められているJEAの働きは、そのような現状の中で人と人、働きと働きを結びつける働き、「ネットワークの結び目作り」です。この「結び目」こそが、これからの宣教に大きな力を発揮していくと考えています。

キリストの身体が語られているエペソ人への手紙4章16節には、「備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。」(新改訳)とあります。「結び目」はそれぞれの働き、存在が会うところudur。その部分が強められる必要があります。また、主にある結び目を積極的に作っていく努力も大切です。教会の伝道牧会においても、教会員と教会員、働きと働きが次々と結び合わされていくことによって、その母体である教会が強められ御わざが進められているように、今後の日本における宣教も、この結び目が鍵となっていくのだと教えられています。「第6回日本伝道会議」では、講演・コイノニア・プロジェクト・分科会などを通して、同じ関心をもつ人々が出会い、祈り合い、多くの「結び目」、ネットワークが生まれました。各教団・教派の代表者が集まり教団・教派を越えた今後の協力関係(宣教インフラ)作りの準備も進められています。これは各地域教会の宣教協力の後押しにもなるでしょう。各教団の宣教部門責任者や宣教研究部門担当者の情報や意見交換の場を設けたり、青年宣教担当者やパラチャーチの主事が集まり、働く協力も進められたりしています。また、東海地区などでは、今まで培われてきた協力関係を土台に地域独自で宣教会議を聞いています。

日本と世界の宣教のため、さまざまな働き・人・教会・団体の結び目が積極的に作られ生かされていく中で、これからの時代の福音宣教が進んで行くと考えています。JEAに加盟している恵みの中で、そこに加わる私たち日本ホーリネス教団も、新たな意識改革が与えられ、協力し合える「結び目」を大切にしていきたいと思ひます。福音を伝えるために、共にこの日本で労する私たちでありたいと願ひます。



イムヌエル綜合伝道団「イムヌエル教報 856号」(2017.11)

◇ 東海宣教フォーラム

東海地域諸教団の新たな協力の出発点

名古屋教会 内山 勝

東海地域には、東海福音フェローシップ(TEF)という超教派の交わりがあります。同団体が大事にしてきたのは、活動を目的とはせず、相互の交わりを中心とするということで、このゆるさの故に、長年継続することができたと思います。このTEFを母体として、有志により、東海聖書神学塾、TEF地震対策委員会などの活動が行われていますが、数年に一度の割合で「東海宣教会議」も開催されてきました。今回は、9年振りの開催でした。リーダー的な役割を果たしてきた牧師たちが、後進に委ねる形で世代交代がなされての開催で、若い世代によるフレッシュな取り組みが随所に見られました。

9月11～13日(2泊3日)、蒲郡市のホテル竹島を会場に、テーマ「今ここで～感謝・発見・挑戦～」に基づいて、マイケル・オー師(ローザンヌ運動総裁)が3回の主題講演を担当しました。同師は、名古屋市にあるキリスト聖書神学校(CBS)の創設者で、東海の福音宣教に情熱を注いで来られた器でもあります。グローバルな教界の動向とこれからの方向性を明示してくださいました。特に自分にはなく、福音に自信を持つとうとの呼びかけに、大いに励まされました。

次世代の参加を促すために2日目の夜は、ミッション・ナイトが開催され、横山大輔氏らによるスペシャル・コンサート、3人の青年パネラーへの宣教についてのインタビュー、飯田岳師(東京フリー・メソジスト南大沢)による力強いメッセージ「主は青年を用いられる」が語られました。

hi-b.a.、KGK、CCCなどの青年伝道諸団体と2つの神学校の連携と協力が強い推進力となった大会でした。250名を上回る参加者があり感謝でした。

イムヌエル綜合伝道団「イムヌエル教報 857号」(2017.12)

◇ 東洋宣教会ホーリネス教会創設記念日 ホーリネス100周年記念集会

恵みとして受けた苦しみ 課題を共有し、克服へ

国内教会局長 内山 勝

去る10月31日(火)はルターの宗教改革500周年記念日でしたが、日本基督教団赤羽教会で、「ホーリネス100周年記念集会」が行われました。ちょうど100年前のこの日、中田重治らによって、東洋宣教会ホーリネス教会が創設されたからです。

同教会は、戦前に二度のリバイバルと分裂を経験した後、治安維持法によって、牧師たちが一斉検挙され、教会が解散させられるという苦しみを味わいました。戦後、それぞれの導きに従って諸教団に分かれて、今日に至っています。

10年前に、中田重治宣教100周年記念大会が行われましたが、今回の集まりは、その和解の流れを確認することと、現在私たちが直面している共通の課題を乗り越えるために、さらに宣教協力を前進させるきっかけにしたいという願いをもって、企画されました。

午前の記念礼拝では、山口陽一氏(東京基督教大学)が「恵みとして受けた苦しみ」と題して、ピリピ1:27～30から語られました。苦難をも恵みとして与える神さまの愛に感動しました。共同司式による聖餐をもって、主にある和解を形にし、キリストにあって一つであることを感謝しました。短期間の準備でしたが、12教団が共催団体となり、85名の牧師・信徒が出席しました。昼食では、くじ引きで各テーブルに分かれ、和やかな交わりの時をもちました。

午後は、日本ホーリネス教団、イムヌエル綜合伝道回、基督聖協団から発題者が立てられ、各教団が直面している課題を共有し、それを乗り越えるために取り組んでいる働きを共有しました。

牧師不足、兼牧、教会の合同など、同じ課題に直面し苦闘している私たちですが、今後、主にあって連携・協力し、互いに励まし合いながら、主の御国の建て上げのために、共に前進したく願います。

◇ 教会的宣伝会議セミナー報告

教会的宣伝会議2017

本間 尊広

5月3日、浅草橋教会を会場に「教会的宣伝会議セミナー2017～視点を変えれば伝え方が変わる」と題して、神学院の特別公開講座が行われました。これは、セミナー実行委員会として池田紀江姉と本間尊広 が企画し、神学院の了承を得て開催されたものです。スピーカーとして、松谷信司氏(キリスト新聞社代表取締役社長)、丸山泰地氏(教会ホームページ制作「BREADFISH」代表)、上馬キリスト教会の「中の人」(2万人超のフォロワーで注目の教会ツイッターの担当者お二人)をお迎えしました。目からウロコという以上に教会のチラシやホームページ(以下HP)について、わたし自身が今までの意識を変えさせられるセミナーとなりました。

このセミナー全体を通じて、チラシやHPにおいて「教会が伝えたいこと、知らせたいこと」と、チラシ・HPを見て教会に足を運ぼうとする「人々が知りたいと考えていること」にギャップはないのか、ということが一番に問われていたと思います。たとえば、教会HPの場合、どういう内容で、どういう人に読んでほしいのか、ということを考える必要があるということです。現在、新しく教会を訪れる人のほとんどがまずHPをチェックしてから教会に来るという現状では、初めて教会に来る人が少しでも安心して足を運べるようにということ意識すべきであるとか、同じ教会のHPを何度も見る人はまれで、ほとんどが一度見てその教会について判断しているとか、若い人はパソコンではなくスマホなどのモバイル端末でHPを見るので、スマホに対応したHPを作らなければならない、などインターネットの影響や効果にわたしが全く無頓着であったと思わされる内容でした。

チラシに関しても、3つのチラシ・サンプルを見せて、どれが良いチラシか・悪いチラシか、ということが問われ、デザインを重視しすぎて、そのイベントで何がなされるのかよくわからないチラシではなく、何が行われるのかきちんと文字で書いてあるチラシが良く、人々が知りたいことにもっと思いを向けて、教会の広報をなすべきであると強く教えられました。

「教会的宣伝会議セミナー」が気づかせてくれたこと

教育部 山田 証一

このセミナーの大事な点は、教会の広報＝伝道に現代的IT技術を使うためのノウハウ伝授などではありません。キリスト新聞社の松谷さんはじめ講師たちは、多くの教会事例や同社の近著を紹介しながら、初めて教会に来ようとしている方・来た方＝初心者に、教会側は優しい対応をしているか＝寄り添っているかを問いかけます。

チラシ・PR作成などの具体的事例検討で、「だれに呼びかけているか不明なチラシ・・・、『入場無料ただし席上献金アリ』とは、結局有るのか無いのかわからないような不安な説明だ・・・。」など思い当たる指摘にわが教会も同じと反省させられます。

実は多くの教会では教会内でしか使わない宗教的伝統的専門的表現に慣れていて、それを新来会者にもチラシにも使う＝初心者にも押し付けている。そこに教会の甘さと失敗があります。今まさに変化が求められているのです。これはキリスト教用語が無用だとか時代遅れだという意味ではもちろんありません。それ以前に、人々に教会に来て福音に触れてもらうこと、来たいと思っている人の求めに応えていくことです。教会やクリスチャンがバリアフリー化をしていくチャレンジです。

セミナーでは初めての方への宣伝だけではなく、置かれた地域で共に生きる事例が紹介されました。これまで地域とは交流がなかった教会が、新任の牧師と共にカベを乗り越え、ある結婚式に商店街を巻き込んだ企画をし、なんと商店街の方でバージンロードならぬ真っ赤なレッドカーペットを用意してくれ、楽しい式ができたとのこと。悩む教会が閉塞した状況を打ち破っていくステキな一例には励まされます。

教会がこの地と人々に寄り添う使命を本気で考えているなら、このセミナーの発信する声・指摘に聞かなければなりません。自分たちの教会を検証し、実際的に愛する教会、伝道する教会になりましょう。



教会の高齢化・・・その実態

アンケート集計結果から見たものは・・・

広報委員会編

● 社会全体の高齢化と教会

「キリスト教会は信者の高齢化が一般社会よりも早い」と『現代宗教2014』（国際宗教研究所）に論文が掲載されていました。日本基督教団の資料に基づくもので、2004年の60歳以上の信者は全体の約52 %で、日本社会全体の26 % と比べると高齢化が著しいことは明らかであると指摘されています。また教会員数は1964年と2006年を比較するとほとんど変わらないけれども、受洗者数は4800人から1400人と大幅減で、このまま受洗者が増えず、教会員の高齢化や逝去が続けば、高齢化どころか礼拝出席者数がゼロになる教会が出てくるのではないかと。社会全体が少子高齢化を迎えている中で、そのような教会の消滅や合併、無牧や兼牧等の課題が浮き彫りにされていました。

日本福音キリスト教会連合はどうなのか。連合の実態を調べてみようかと広報委員で企画し、アンケートをお願いしました。全体で141の伝道所を含む教会からお答えいただきました。ご協力をご感謝致します。

● アンケート結果

Q1・年代別構成（円グラフ参照）

礼拝出席者総数は7619人（教会あたり約55人）、そのうちの教会員数は4796人（教会あたり約35人）でした。この数は定期的な礼拝出席者という問いでしたので、必ずしも平均出席者数を意味してはいません。

代毎に分けると、一番多いのはどちらも60代でした。教会員数で見た場合、2番目に多いのが70代、次が50代で、その差は14人と大きくありません。

礼拝出席者総数は70代以上が全体の21 %で、60代以上では全体の約38 %、4割近い比率になります。教会員数ではさらにその比率は大きくなり、70代以上は約28 %、60代以上になると約47 %で、全体の約半数を占めていることが分かりました。

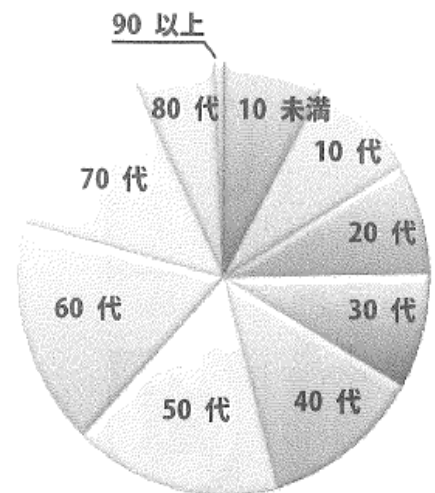
また礼拝出席者総数に対する教会員の割合は約6割で、4割近くが非教会員でした。その非教会員の34 %は20代未満です。この年代であれば、ほとんどは未受洗者と考えて良いでしょう。人数は1243人で、単純に教会数で割れば約9人となります。つまり、若い世代の者も教会にはいるということです。都市部への偏りはあるでしょう。しかし、この若い世代が確実に信仰へ導かれるならば、将来的には地方の教会の期待にもつながるはずで、高齢化の問題の一つの大きな鍵と言えるでしょう。

Q2・交通手段がない、あるいは施設入所等の理由で礼拝出席のできない高齢者数は？

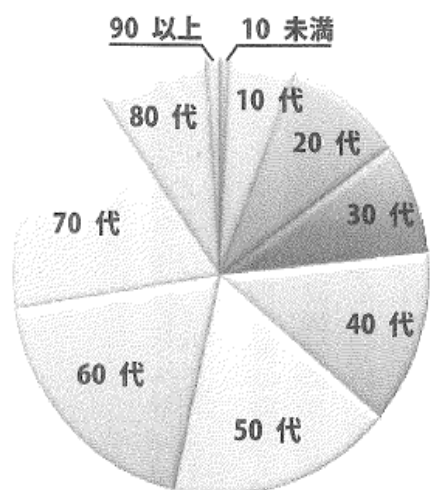
141教会で294人でした。平均礼拝出席教会員数約35名に対して約2名の信徒の方が高齢のために礼拝出席出来ていないということになります。

Q3・礼拝出席できない教会員のためにしていることは？

110の教会から何らかのことをしている と回答がありました。そのほとんどに訪問 と祈りが挙げられていました。訪問は牧師だけでなく役員や信徒の方も行かれています。週報やメッセージの音声もインターネットやCD、テープで届けられていました。説教の原稿を送っている教会もありました。いくつかの教会では礼拝のライブ配信も行なっていました。また約2割の教会が出張聖餐式を執り行っていました。



定期的礼拝出席者の年代別割合



教会員の年代別割合

Q4・高齢化ゆえに困っていることは？

87教会の回答の中には、困っていることは特にないとの答えも複数ありました。高齢化をむしろ積極的に捉えているということかもしれません。おそらくどの教会もそのように受け止めているのだと思いますが、以下の課題が挙げられていました。

① まずは身体的課題で、耳が聞こえ難くなってきている方への配慮についてです。説教が聞き取れず、他の人に迷惑をかけるといけないからという理由で礼拝に出て来られなくなる人もおられるということでした。

足腰が弱くなり、二階の礼拝堂への上り下りが難しいという声も多く挙げられていました。長時間座っていることが困難な方もおられます。

また車の運転が困難になり、どのようにして礼拝に来るかということも大きな課題のようです。送迎してもらうことを遠慮される方もおられるということですが、送迎の奉仕者不足の問題は多くの教会が抱えていました。

認知症を患う信徒の方も複数おられました。帰り道が分からなくなって捜索した、他人の持ち物を自分の物と言って持ち帰ったなどの事例が挙げられていました。

② 家族に関することでは、介護されるご家族の状況によって訪問が出来なくなった、急に召されて略歴や遺言のことなどご家族との対応に苦慮したなど。

③ 奉仕に関することでは、力仕事の担い手が少ない、高齢や体調不良のために奉仕を辞退される。送迎する奉仕者も高齢化してきている。食事作りなど奉仕者が足りない、次を担う世代の者がいないために役員が立てられないなど。

④ 会堂に関することでは、建物が古くバリアフリーでない、冬が寒い、お墓が無いなど。

⑤ 活動や教勢に関することでは、トラクト配布の人出が不足し、体力的にも雰囲気的にも若者や子供向けの行事を行うことが難しい、教勢全体の活力の減退、などが挙げられていました。

⑥ 経済的なことについて、年金生活者が増えて献金が減少し、教会会計の貧窮があるという教会も少なくありませんでした。若者が進学や就職で地元を離れ、働く世代の減少によって地方の教会の財政問題は益々顕著になるという指摘もありました。

⑦ その他として、新しい賛美に挑戦しにくい、泊りがけの行事が難しくなった、男性は頑固になる傾向がある、信仰の先輩たちの証しが聞けなくなってきている、高齢化よりも高齢者に対する教会員のマイナスイメージが問題という回答もありました。

Q5・高齢化のために工夫していることは？

高齢化のゆえの問題はありつつも、すでに様々な工夫がなされていました。

① 会堂に関することでは、トイレのリフォーム、冷暖房の配慮、個別のスピーカー設置やワイヤレスイヤホンなど音響設備の整備、エレベーターや昇降機、階段、手すり、畳コーナーなどの設置など。一千万円以上をかけて外付けのエレベーターをつけた教会もありました。

② 備品に関することでは、車椅子の常備、座りやすい椅子の設置や用意、聖書を開いて置くためのテーブルの設置など。

③ 礼拝に関することでは、時間が長くないような配慮、説教原稿を配布しているなど。多くの教会が送迎を工夫しておられましたが、送迎チームを設置しているところもありました。

④ 視聴覚資料に関することでは、週報等印刷物やスクリーンに映す文字の拡大、大型版聖書の備えなど。

⑤ 集会や交わりに関することでは、月に1~2回の高齢者の集い、音楽療法、終活の学び、体操教室、大きいはっきりした声での会話、礼拝後に高齢の方と交わることの心がけ、教会員の自発的な訪問や電話、葬儀の希望を書いてもらう、介護を必要とする家族を持つ方々のための会などが行われていました。

⑥ その他、小礼拝室を含む高齢者用のアパートを所有している教会もありました。

Q6・高齢化ゆえに与えられている恵みや感謝は？

各教会の真実な証しを、お分かち致します。

・教会は、世代間の価値観を超えて、全世代が集う恵みの場であると改めて感じる。教会にとって子どもは宝、若い人は力、高齢者は誇りだと思ふ。

・高齢の信徒の方の忠実な礼拝出席は大きな励ましであり、良き証しとなっている。

・祈祷会にも出席し、いつも教会のために祈ってくださる。

・若い人よりも時間があり、元気もあって、むしろ実戦力として積極的に奉仕して下さり助けられている。

・長年ともに教会生活をしてきた姉妹たちの支え合い、助け合う交わりが良い模範となっている。

- ・地域のネットワークに強いので、よく集会に新来者を誘ってくれる。
- ・長い人生を送ってきた人が主にすがって歩んでいるということが示す無言の説得力は若い牧会者には大きな助けである。
- ・孫の年齢位の牧師を立ててくださることに感謝。みことばを開く姿勢におしえられる。

● 高齢化に教会はどう向き合うか

連合の教会にも例外なく高齢化の波は押し寄せていました。けれども今回の集計から、若者も教会に集まっていること、教会ならではの取り組みと高齢化ゆえの恵みもたくさんあることが分かりました。高齢化ゆえの様々な課題があり、近隣教会との協力がさらに必要となっても、まずは個々の教会に連なるひとりひとりが、老いも若きも教会のかしらなるキリストにしっかりとつながり、支え合いながら、今日の主のわざに励むことが出来ればと思います。そのような教会を主はこれから先も必ず祝福へと導いてくださるのではないのでしょうか。

「教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。」（エペソ1:23）

※ アンケート回答数141教会（加盟教会190、伝道所18、回収率68%）

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団「アッセンブリー News NO.743」（2017.8）

教団の動き 82

総務局長 内村 保

● 「教会再生プラン」二期目へ

国内宣教献金による「教会再生プラン」第一期モデル教会プロジェクトが6月で3年目を迎え、感謝のうちに修了致しました。

岡山県総社市で開催された国内伝道部主催「リフレッシュカンファレンス2017」（伝道研修会 7月10日～12日）では、第一期のモデル教会となった4教会（信愛、小矢部、せとうち、松山神愛）の感謝報告会が行われました。

また、第二期日のビルドアッププロジェクト（BP）が開始され、6教会の担任教師とBPコーディネーターとの初打合せとなりました。

さらに今回は第一期日と第二期日の担任教師同士の「担任教師交流会」、BPコーディネーター同士の「BPC交流会」も持たれ、第一期の取り組みの成果や課題を共有し、二期日以降の働きにそれらが活かされるようになりました。

JOMA 通信 NO.79（2017年10月）

日本宣教と世界宣教

2017年度 JOMA 会長 OM 日本 理事長 酒井 信也

第6回日本伝道会議にあわせて『日本宣教のこれからが見えてくる—キリスト教の30年後を読む』（いのちのことば社）と題されたデータブックが発行された。

「教会消滅？」というショッキングな文字が帯を飾る本の内容は、日本の教会の将来が決して明るいものではないことを示唆している。教職者の平均年齢67.8歳、70代80代の教職者が占める割合が全教会の約半数と推測される。一方で、将来の教会を担うべき20代30代の教職者の割合は2%しかない。日本のプロテスタント教会の全教会数約7,900で今後20年ほどの間に現在の教職者の約半数がいなくなるとすれば、その数に匹敵する人々が神の召しに答えて教会の働きに押し出されなければならない。データブックには神学校の現状も取り上げられているが、

どの神学校でも学生数が減少し、卒業生が教会教職者となる割合の減少も報告されている。このままでは近い将来無牧となる教会が急増化することは避けられそうにない。

このような切実な国内の教会の必要を前にして、貴重な若い人材を世界宣教へ送り出すような余裕はとてもないという声をよく耳にする。教会が小さく経済的にも困っている状況で、世界宣教に携わりたいという信徒がいても教会として送り出すことはできないという声も、宣教師をリクルートする側として私自身何年も前から聞かされてきた。しかし私は、将来の日本の教会を担うべき若者たちを育成するためには、世界宣教へと彼らを送り出すことが一つのカギを握っていると感じている。

OM 日本はミャンマーの複数の孤児院を支援し、毎年日本からも訪問する働きを15年間続けてきた。貧しい孤児院が支援により自立していくと、そこでの礼拝が周辺住民への伝道の拠点となって、教会となり、施設の建物を利用して自前で伝道者を養成するための聖書学校を始めることが多くある。先日訪問した孤児院でも、十名の若者が住み込みで学んでいた。志願者があまりにも多いために既存の聖書学校ではとても対応できず自前で設立してしまうのだ。若い神学生たちを見て、この国でこれほど多くの若者が伝道者として召されているのに、なぜ日本では召される若者たちがあまりにも少ないのかと思わされる。日本の若者たちは神に召されていないのだろうか？ そんなことはないはずだ。神はご自身の栄光の教会を牧するための必要を満たして余りある数の若者たちを、日本でも召しておられるに違いない。しかし日常生活においてあまりにも周りの雑音が大きく、召しておられる神の声が聞こえないのではないだろうか。

国外に住む日本人が現地で救いに導かれる割合が高いことをよく聞く。実際に、身近にもそのような人たちが何人かおられる。日本社会を離れた場所で神の声を聞いた人たちだ。牧師、伝道師、宣教師といった教職の働きへの召しの声についても同じことが言えるのではないか。90年代からこれまで OM を通して世界宣教の現場へ送り出した若者は60名を超える。その多くは歴代の福音宣教船ドゥロス号、ロゴス I1号、ロゴス・ホープ号に2年間のボランティアとして参加した。

参加者は初めから宣教を志している人だけではない。その多くは、ボランティア活動を通して世界を見たい、経験したいという若者で、高校を卒業してすぐの参加も多い。しかし実際に世界での宣教に携わり、神の働きに触れ、神に取り扱われる体験を通して変えられていく。2年の後に日本へ帰る頃には、次に神が導いておられる働きは何かと探し始め、神の召しの声を探ろうとする。その召しは、決して世界宣教に対する召しだけではない。実はその多くは日本の教会に仕えるようにとの召しなのである。短期宣教体験の後、帰国して神学校へ進み、牧師、伝道者、伝道団体スタッフ、あるいは宣教師などになった人は参加者の実に半数以上にのぼる。世界宣教の現場へと若い人たちを送り出すことは、日本伝道を担うべく召されている人々を呼び覚ますためでもあるのだ。



あとがき

厳しい寒さが日本列島を覆う中、各地で雪による被害や事故が発生しています。皆様はいかがでしょうか。2018年も早や2か月を過ぎようとしています。日本宣教リサーチの働きも何とか守られ、予定より大分遅くなってしまいましたが、ここに「日本宣教ニュース」第11号を皆様にお届けすることができることを感謝致します。

今回号の「巻頭言」及び JMR レポートは、凶らずも東日本大震災と熊本地震や九州北部豪雨災害の支援活動に、先頭に立って取り組まれているお二人の先生に、お忙しい中ご無理をお願いして寄稿をしていただきました。

九州キリスト災害支援センターの立ち上げに当たっては、宮城宣教ネットワークでの貴重な経験が分かち合われ、いち早く支援ネットワークが構築されたこともあり、九州においても支援活動を通して地域からの信頼を得るようになり、東日本と同じように「キリストさん」と呼ばれるようになったことが報告されています。このことを私たちはどう受け止めたらよいのでしょうか。

日本のすべての地域で、地域の人から「キリストさん」と呼ばれるくらい信頼されるようになるためには、同じような災害に遭わないとダメなののでしょうか。大友先生が「宮城宣教ネットワークが成功しているのは、被災する前からビジョンを持って宣教に取り組んでいたからで、震災が起きてから地域の宣教をどうするかネットワークをどう構築するかとか言っても遅いということに、日本の教会はもっと気が付くべきだ」と言われた言葉が心に響きます。

今回号のもう一つの特筆すべき記事として、日本福音キリスト教会連合が教会の高齢化の実態を調査したアンケートの集計結果を「JECA フォーラム」から転載させていただきました。「教会の高齢化」は、日本の教会全体に共通する問題であり、他教会においても参考になるのではないかと思います。

年度末の時期を迎え、各教団や教会では総会が行われる時期となりました。日本宣教の厳しい現状を見る時、日本宣教の未来は、各教会がいかに「キリストへの愛と忠誠に生きる教会」へと「変革」をし続けていくことができるかにかかっているように思います。チャールズ・リングマは「教会は変革を嫌う。それでも教会における根本的変革はいまや、必然にして急務である」（『風をとらえ、沖へ出よ』）と述べています。また、ピーター・スキャゼロは「どんな教会の働きも、教会や働きに携わるリーダーの情緒的・霊的な健全性にかかっている。霊的なリーダーが成功するかどうかは、リーダーの持つ専門知識、賜物や経験以上に、内側での生き方に関わっている。」（『情緒的に健康な教会をめざして』）と述べています。教会の働きを担うリーダーの責任は重いと云えます。（初穂）

献金者名（2017年9月～2018年2月）

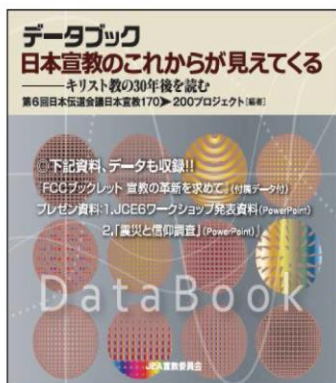
◎尊いご支援に、心から感謝申し上げます。（敬称略）

柴田美枝子、渋谷和之、島田治夫、鈴木陽一、花蘭文子、柳下弘、清瀬福音自由教会、南紀キリスト教会、日本キリスト合同教会、本郷台キリスト教会、やしおホープフルチャーチ



刊行物紹介

データブック 『日本宣教のこれからが見えてくる』 CD-ROM 版（好評発売中）



グラフや図がカラー
表も見やすい
有用なデータが満載
プレゼン資料も収録
定価 1,000 円+税

【CD-ROM の内容】

- 『データブック「日本宣教のこれからが見えてくる」－キリスト教の30年後を読む』
- 『データブック FCC ブックレット 宣教の革新を求めて』（付属データ付）
- プレゼン資料： 1. JCE6 ワークショップ発表資料（PowerPoint）
2. 「震災と信仰調査」（PowerPoint）

【編者】第6回日本伝道会議「日本宣教170 ▶ 200 プロジェクト」
東京基督教大学国際宣教センター 日本宣教リサーチ
【発行】日本福音同盟（JEA）宣教委員会

キリスト教葬儀研究会

日本宣教におけるキリスト教葬儀 開かれたキリスト教葬制文化を目指して

巻頭言	倉沢正則
一般葬儀とキリスト教葬儀の現状	柴田初男
日本の葬送儀礼の宗教的背景	大和昌平
葬儀論から日本宣教論へ	稲垣久和
近代日本における死者儀礼と教会	篠原基章
－キリスト教葬制文化を形成していくために－	
未信者にも開かれたキリスト教葬式を求めて	倉沢正則
キリスト教葬制文化開拓のケース・スタディ	清野勝男子
付記「キリスト教葬儀に関するアンケート調査」報告書	日本宣教リサーチ まとめ 大和昌平
コラム 1～5 終活セミナー開催の理由他	野田和裕

NO.10

February 2018



東京基督教大学 国際宣教センター

定価 1,000 円+税

2018年3月中旬出版予定

【お申込み・お問合せ】

E-mail: fcc@tci.ac.jp FAX: 0476-31-5521

感謝のご報告と継続支援のお願い

日本宣教リサーチ (JMR) は、この4月で発足から5年目を迎えます。旧教会インフォメーションサービス (CIS) の支援者の継続的なご支援や、新たな支援者の方々のご支援をいただき、活動が支えられて来ましたことを心より感謝いたします。

2018年度は、JCE6「日本宣教170▶200プロジェクト」の流れを引き継ぎ、新たにJEA(日本福音同盟)宣教委員会宣教研究部門の一員として、日本宣教の課題である「教会の再生」「次世代育成」「地域宣教ネットワークの構築」に取り組んでいきます。

どうか引き続きJMRの働きにご期待くださり、更なるご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

JMRの活動は、東京基督教大学に寄付される指定献金によって賄われます。会員には一般賛助会員と特別賛助会員があります。各会員の要件と提供される成果物は以下の通りです。

- (1) **特別賛助会員**：趣旨に賛同し、支援してくださる教団・教派、宣教団体等
 - ・一口 30,000 円 (何口でも)
 - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
 - ・毎年2~4回「日本宣教ニュース」のご提供
 - ・毎年1回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート(詳細篇)のご提供
- (2) **一般賛助会員**：日本宣教に重荷と関心を有する個人、教会等
 - ・一口 2,000 円 (何口でも)
 - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
 - ・毎年2~4回「日本宣教ニュース」のご提供
 - ・毎年1回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート(概要編)のご提供

日本宣教リサーチへの支援金は、税制優遇措置が受けられます

東京基督教大学への寄付金(献金)は、税額控除制度の認定を受けているため、税制上の優遇で還付金が最大で寄付金(献金)額の約50%となります。

詳しくは、☎0476-46-1131(TCI募金係)までお尋ねください

郵便振替口座:00110-5-575648 学校法人 東京キリスト教学園明日の宣教者育成募金

* お振込みの際には、振替用紙に「**日本宣教リサーチ 指定**」と必ずご記入ください。

(振替用紙がお手元がない場合はこちらよりお送りいたします)



東京基督教大学 国際宣教センター

日本宣教リサーチ

【Japan Missions Research】

〒270-1347 千葉県印西市内野三丁目 301-5

学校法人 東京キリスト教学園 東京基督教大学 国際宣教センター内

TEL: 0476-31-5522 FAX: 0476-31-5521 E-mail: jmr@tci.ac.jp

<http://www.tci.ac.jp/institution/fcc/jmr>

日本宣教リサーチ代表 山口 陽一 (東京基督教大学大学院神学研究科委員長)

日本宣教リサーチ研究員 柴田 初男